

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』藤田孝典（朝日新書、2015.6）（2）「下流老人の現実」
「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015.9.6）

第2章 下流老人の現実

2A: 4つのケース

わたしは、さいたま市のNPO法人で生活困窮者の相談を受け支援している

相談に来る人の半数以上が高齢者

異口同音に「こんなになるとは想定外だった」という

しかし、本人がどれだけ努力しても下流に陥る理由があると、私は実感している

ケースA.

新潟県出身の男性(76歳) (生まれ 1938年頃)

父親は漁師。自分は一人息子。

県内の公立高校を卒業。「若いころは不良でさ。それでも両親が見捨てず育ててくれた。」

自衛隊に入るが、上司にいじめられて辞めた。

県内の飲食店に正社員として雇われ、料理人として再出発。

中華料理店で長く勤めた。結婚せず生涯独身。

両親は県内で別々に暮らしていた。父は漁師、母は膠原病を患っていた。

40才前のころ、父(64歳)が肝臓がんで余命1年と分かった。

正社員の仕事を辞め、実家に帰り、父親の看病を1年。

母親も父親の死後様態悪化、母親を10年間介護して、看取った。

50台半ば、県内で職を探したが、食っていけないものしかなかった。

50台半ば(1993年頃)実家を引き払い、首都圏に出る。以後親戚と疎遠。

都内、神奈川、埼玉県で、介護の仕事を中心に働いた。

ヘルパーの資格はないけれど、(他より)給料はよかった。仕事は楽しかった。

65歳で仕事を辞めた。貯金は500万円ほど。

年金は月9万円(厚生年金)。(両親の介護離職で年金加入期間が短く、年収が低かったから)

糖尿病が見つかり、(介護で痛めた)腰痛が悪化、医療費がかかって

貯蓄がみるみる減った。

貯蓄が底をつき、生活困窮に陥る。

年金9万円。家賃5万円。残り4万円では食べていけない。野草を食べ

て飢えをしのいだ。

NPOに相談に来た。5年前。71歳ころ(2010年頃)

生活保護を申請。年金9万+生活保護4万。医療費補助あり。

低家賃のアパートに転居(家賃3.5万円)。現在は体重も回復、

「もうあと数か月、助けを求めていることが遅かったら、餓死していたろう

「年金をもらっていたから、生活保護が受けられるなんて知らなかった」

ケースB: うつ病の娘を支える夫妻

Bさん(77歳、生1937年頃)、妻(74)、長女(48)

埼玉県出身。幼いころからの知り合いで、20歳台で結婚。

埼玉県の町工場で、金型工としてずっと勤務。

マイホーム(一戸建て)も買い、長女も生まれて、幸せだった。

経済成長期で、腕の良い金型工として順調、知事表彰も受けた。

下請け・孫請けの仕事が多く、給料は低かったが、それほど苦にならな

かった。

(1980年頃)長女が中学校でのいじめが原因で、不登校になった。

仕事が忙しいころだった。「学校に行きたくないなんて怠けものだ」と

叱った。娘は不登校・うつ病になった。

家族で、一生懸命に娘の勉強や生活をサポートして、短大を卒業させ

長女は、短大卒業後、うつ病と戦い続けていて、一度も仕事につけて

いない。Bさん夫妻が生活をサポート。

あまり貯金はできていない。

定年まで町工場で働いた。(65歳?とすると、2003年ころ?) (長女36

年金は(二人で)月17万円。これで3人が生活するのは大変。

マイホームを売り(お金に換えて)、賃貸アパート(家賃9万円)に移る。

長女は、現在毎週精神科の病院に通っているが、なかなか良くならな

3人の生活費は月26万円ほど、貯金を取り崩している。長女の医療費

が大きい。

心配事: 自分たち夫婦の健康がいつまで続くか、貯金が底をつきそ

う。長女の今後の最大の心配。

自分たちはなんとかできて、長女のうつ病が「想定外」

ケースC:

Cさん(69歳、生1946年ころ)、神奈川県出身、男性。

大学に入学(1965年ころ?)、学生運動が激しくあまり授業がなかった。

(22歳頃?)大学を中退、神奈川県建設会社の事務職員として働く。

若いころは年収300万円くらい。普通の暮らしができていた。

生涯独身、賃貸アパート暮らし。基本的に健康。

40年間事務職員として働いた。会社は厚生年金に入っていなかった。

退職前は、年収500万円くらい、ボーナスもあった。

62歳(2008年頃)で、早期退職。少し体調を崩すことも増えたため。

退職金約1500万円、貯金約1500万円。合計3000万円ですべて安泰と思

った。年金はなし(厚生年金、国民年金に入っていなかったから)

自分の墓くらい自分で用意しておきたかった。業者に約900万円払

う。心筋梗塞で、1年間に2度倒れた。手術、治療、長期入院の費用が高

額療養費助成制度については知らなかったから、利用しなかった。

治療費と生活費で、貯蓄は完全に消えてしまった。

賃貸アパートも追い出されて、ネットカフェで生活していた。

NPOに相談に来た。(2014~15年頃?)

現在、生活保護を受け、(高額な)医療費も補助を受けている。

「まさか立て続けに病気になると思っていなかった。生活保護になると

思っていなかった。」

ケースD:

Dさん(67歳、生1948年頃)、妻(熟年離婚)、長女(結婚独立)

地方の大学を出て、埼玉県内で銀行員として働く。

結婚し、長女を育てる。順調。

銀行員として、いろいろな付き合い、なじみの飲食店などあり。

50歳台半ば(2003年頃?)から、Dさんに変調。

得意であったはずのお金を数える業務などがうまくできなくなる。職場

でストレス。

家族にストレスをぶつけ、喧嘩が絶えなくなる。感情の起伏が激しく

(この頃に若年性認知症を発症したのだと推測されるが、本人も、家族

も、職場もそれに気が付かなかった。)

長女は家を出て、その後結婚した。

銀行から退職を促され、早期退職した。退職金を得た。

本人は「会社で嫌がらせをしてくる上司がいて、いやになって辞めた」と

(現在)言っている。

退職後、せっかくの退職金を飲食代に湯水のごとく使った。本人は「昔

のなじみの店だから」という。

その後、夫婦関係が破たん。協議離婚。資産、年金を半々に分配。

60歳代で、年金12万円ですべて一人暮らし。

一人暮らしになったことで、さらに老後資金や年金を散財してしま

った。家賃を3ヶ月滞納し、大家から退去を言い渡された。

数か月間、埼玉県内の公園で路上生活をする。

長女が家賃滞納分を立て替えて支払い、退去費用も捻出した。しか

し、それ以上の面倒をみれない。

長女が「路上生活をしている父親を保護してほしい」とNPOに求めた。

Dさんを保護した。認知症が進んでいて、意思疎通ができないことも。

「ありがとう、ありがとう。困っていたんだよ。家に帰れなくなってね。」

NPOのシェアハウスで保護し、介護保険の申請、病院への同行、借金

の整理、金銭の管理などを行ってきた。

下流化の最大の原因は、本人も周囲の人々も認知症に気づかず、生

活を続けてしまっていたこと。

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』藤田孝典（朝日新書、2015.6）（2）『下流老人の現実』

「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015.9.6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース

わたしは、さいたま市のNPO法人で生活困窮者の相談を受け支援している
相談に来る人の半数以上が高齢者
異口同音に「こんなになるとは想定外だった」という
しかし、本人がどれだけ努力しても下流に陥る理由があると、私は実感している

ケースA: 新潟県出身の男性(76歳) (生まれ 1938年頃)

父親は漁師。自分は一人息子。
県内の公立高校を卒業。「若いころは不良で。それでも両親が見捨てず育ててくれた。」
自衛隊に入るが、上司にいじめられて辞めた。
県内の飲食店に正社員として雇われ、料理人として再出発。
中華料理店で長く働いた。結婚せず生涯独身。
両親は県内で別々に暮らしていた。父は漁師、母は膠原病を患っていた。

40才前のころ、父(64歳)が肝臓がん で余命1年と分かった。
正社員の仕事を辞め、実家に帰り、父親の看病を1年。
母親も父親の死後様態悪化、母親を10年間介護して、看取った。
50台半ば、県内で職を探したが、食べていけないものしかなかった。
50台半ば(1993年頃)実家を引き払い、首都圏に出る。以後親戚と疎遠。
都内、神奈川、埼玉県で、介護の仕事を中心に働いた。
ヘルパーの資格はないけれど、(他より)給料はよかった。仕事は楽しかった。
65歳で仕事を辞めた。貯金は500万円ほど。

年金は月9万円(厚生年金)。(両親の介護離職で年金加入期間が短く、年収が低かったから)
糖尿病が見つかり、(介護で痛めた)腰痛が悪化、医療費がかかって貯蓄がみるみる減った。
貯蓄が底をつき、生活困窮に陥る。
年金9万円、家賃5万円、残り4万円では食べていけない。野草を食べて肌えをしのいた。

NPOに相談に来た。5年前。71歳ころ(2010年頃)
生活保護を申請。年金9万+生活保護4万。医療費補助あり。
低家賃のアパートに転居(家賃3.5万円)。現在は体重も回復。
「もうあと数か月、助けを求めることが遅かったら、餓死していたらうね。」
「年金をもらっていたから、生活保護が受けられるなんて知らなかった」

ケースB: うつ病の娘を支える夫妻 Bさん(77歳、生1937年頃)、妻(74)、長女(48)

埼玉県出身。幼いころからの知り合いで、20歳台で結婚。
埼玉県の町工場、金型工としてずっと勤務。
マイホーム(一戸建て)も買い、長女も生まれて、幸せだった。
経済成長期で、腕の良い金型工として順調、知事表彰も受けた。
下請け・孫請けの仕事が多く、給料は低かったが、それほど苦にならなかった。

(1980年頃)長女が中学校でのいじめが原因で、不登校になった。
仕事が忙しころだった。「学校に行きたくないなんて思っただけ」と叱った。娘は不登校・うつ病になった。
家族で、一生懸命に娘の勉強や生活をサポートして、短大を卒業させた。
長女は、短大卒業後、うつ病と戦い続けていて、一度も仕事につけていない。Bさん夫妻が生活をサポート。
あまり貯金はできていない。
定年まで町工場働いた。(65歳?とすると、2003年ころ?) (長女36歳)

年金は(二人で)月17万円。これで3人が生活するのは大変。
マイホームを売り(お金に換えて)、賃貸アパート(家賃9万円)に移る。
長女は、現在毎週精神科の病院に通っているが、なかなか良くならない。
3人の生活費は月26万円ほど、貯金を取り崩している。長女の医療費が大きい。
心配事: 自分たち夫婦の健康がいつまで続くか、貯金が底をつきそう。長女の今後の最大の心配。
自分たちはなんとかできて、長女のうつ病が「想定外」

ケースC: Cさん(69歳、生1946年ころ)、神奈川県出身、男性。

大学に入学(1965年ころ?)、学生運動が激しくあまり授業がなかった。
(22歳頃?)大学を中退、神奈川県の建設会社の事務職員として働く。
若いころは年収300万円くらい。普通の暮らしができていた。
生涯独身。賃貸アパート暮らし。基本的に健康。
40年間事務職員として働いた。会社は厚生年金に入っていなかった。
退職前は、年収500万円くらい、ボーナスもあった。

62歳(2008年頃)で、早期退職。少し体調を崩すことも増えたため。
退職金約1500万円、貯金約1500万円。合計3000万円でお金持ちになった。
年金はなし(厚生年金、国民年金に入っていないから)
自分の暮らいく自分で用意しておきたかった。業者に約900万円払った。

心筋梗塞で、1年間に2度倒れた。手術、治療、長期入院の費用が高額。
高額療養費助成制度については知らなかったから、利用しなかった。
治療費と生活費で、貯蓄は完全に消えてしまった。
賃貸アパートも追い出されて、ネットカフェで生活していた。

NPOに相談に来た。(2014~15年頃?)
現在、生活保護を受け、(高額の)医療費も補助を受けている。
「まさか立て続けに病気になると思っていなかった。生活保護になると思っていなかった。」

ケースD: Dさん(67歳、生1948年頃)、妻(熟年離婚)、長女(結婚独立)

地方の大学を出て、埼玉県内で銀行員として働く。
結婚し、長女を育てる。順調。
銀行員として、いろいろな付き合い、なじみの飲食店などあり。

50歳台半ば(2003年頃?)から、Dさんに突如。
得意であったはずのお金を数える業務などがうまくできなくなる。職場でストレス。
家族にストレスをぶつけ、喧嘩が絶えなくなる。感情の起伏が激しくなった。
(この頃に若年性認知症を発症したのだと推測されるが、本人も、家族も、職場もそれに気が付かなかった。)
長女は家を出て、その後結婚した。
銀行から退職を促され、早期退職した。退職金を得た。
本人は「会社で嫌がらせをしてる上司がいて、いやになって辞めた」と(現在)言っている。

退職後、せっかくの退職金を飲食代に満水のごと使った。本人は「昔のなじみの店だから」という。
その後、夫婦関係が破たん。協議離婚。資産、年金を半々に分配。
60歳代で、年金12万円だけで一人暮らし。
一人暮らしになったことで、さらに老後資金や年金を散財してしまっった。
家賃を3ヶ月滞納し、大家から退去を言い渡された。
数か月間、埼玉県内の公園で路上生活をする。
長女が家賃滞納分を立て替えて支払い、退去費用も捻出した。しかし、それ以上の面倒をみれない。

長女が「路上生活をしている父親を保護してほしい」とNPOに求めた。
Dさんを保護した。認知症が進んでいて、意思疎通ができないことも。
「ありがとう、ありがとう。困っていたんだ。家に帰れなくなってね。」
NPOのシェアハウスで保護し、介護保険の申請、病院への同行、借金の整理、金銭の管理などを行った。
下流化の最大の原因は、本人も周囲の人々も認知症に気づかず、生活を続けてしまっていたこと。

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典（朝日新書、2015.6） (2) 「下流老人の現実」
 「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015.9.6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース ケースA

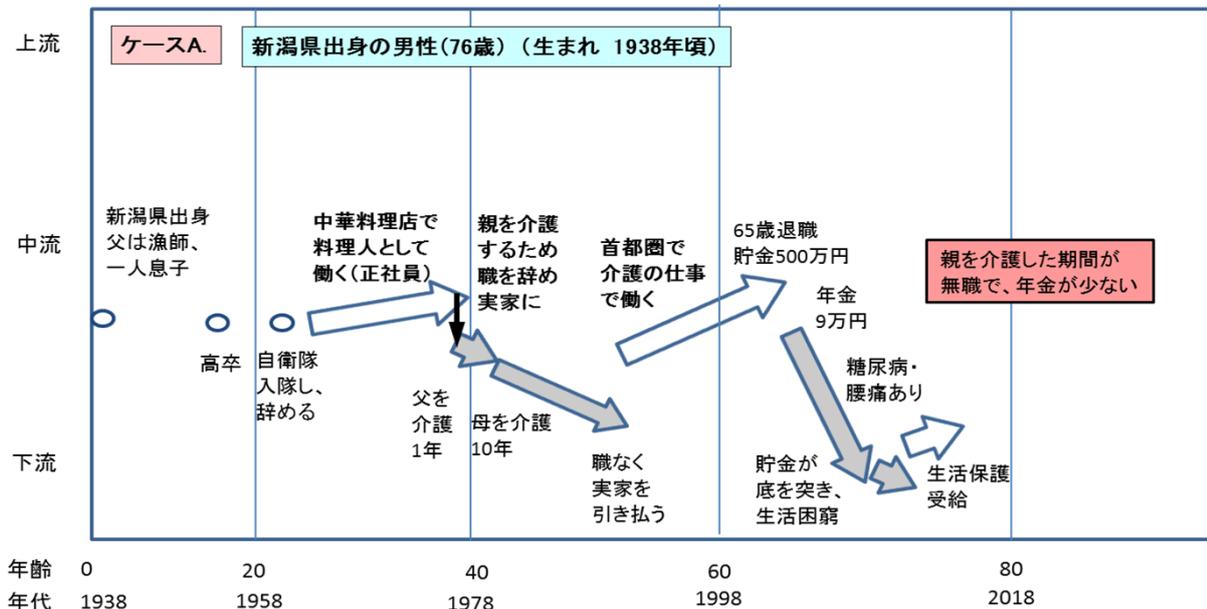
わたしは、さいたま市のNPO法人で生活困窮者の相談を受け支援している

相談に来る人の半数以上が高齢者

異口同音に「こんなになるとは想定外だった」という

しかし、本人がどれだけ努力しても下流に陥る理由があると、私は実感している

ケース概要の図示： 中川 徹（2015.9.7）



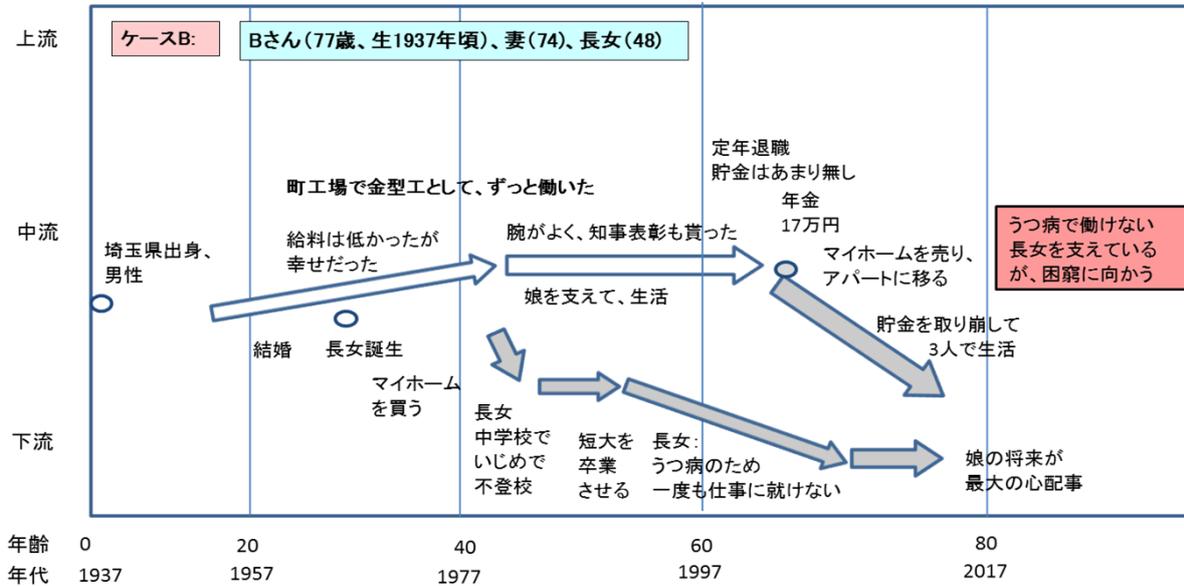
ケースA. 新潟県出身の男性(76歳) (生まれ 1938年頃)

<p>父親は漁師。自分は一人息子。</p> <p>県内の公立高校を卒業。「若いころは不良で。それでも両親が見捨てず育ててくれた。」</p> <p>自衛隊に入るが、上司にいじめられて辞めた。</p> <p>県内の飲食店で正社員として雇われ、料理人として再出発。</p> <p>中華料理店で長く勤めた。結婚せず生涯独身。</p> <p>両親は県内で別々に暮らしていた。父は漁師、母は膠原病を患っていた。</p> <p>40才前のころ、父(64歳)が肝臓がんで余命1年と分かった。</p>	<p>正社員の仕事を辞め、実家に帰り、父親の看病を1年。</p> <p>母親も父親の死後様態悪化、母親を10年間介護して、看取った。</p> <p>50台半ば、県内で職を探したが、食っていけないものしかなかった。</p> <p>50台半ば(1993年頃)実家を引き払い、首都圏に出る。以後親戚と疎遠。</p> <p>都内、神奈川、埼玉県で、介護の仕事を中心に働いた。</p> <p>ヘルパーの資格はないけれど、(他より)給料はよかった。仕事は楽しかった。</p> <p>65歳で仕事を辞めた。貯金は500万円ほど。</p> <p>年金は月9万円(厚生年金)。(両親の介護離職で年金加入期間が短く、年収が低かったから)</p>	<p>糖尿病が見つかり、(介護で痛めた)腰痛が悪化、医療費がかかって貯蓄がみるみる減った。</p> <p>貯蓄が底をつき、生活困窮に陥る。</p> <p>年金9万円。家賃5万円。残り4万円では食べていけない。野草を食べて飢えをしのいだ。</p> <p>NPOに相談に来た。5年前。71歳ころ(2010年頃)</p> <p>生活保護を申請。年金9万+生活保護4万。医療費補助あり。</p> <p>低家賃のアパートに転居(家賃3.5万円)。現在は体重も回復、</p> <p>「もうあと数か月、助けを求めることが遅かったら、餓死していたらうね。」</p> <p>「年金をもらっていたから、生活保護が受けられるなんて知らなかった」</p>
---	--	---

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典（朝日新書、2015. 6） (2) 「下流老人の現実」
 「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015. 9. 6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース ケースB

ケース概要の図示： 中川 徹（2015. 9. 7）



ケースB: うつ病の娘を支える夫妻

Bさん(77歳、生1937年頃)、妻(74)、長女(48)

埼玉県出身。幼いころからの知り合いで、20歳台で結婚。

埼玉県の町工場で、金型工としてずっと勤務。

マイホーム(一戸建て)も買い、長女も生まれて、幸せだった。

経済成長期で、腕の良い金型工として順調、知事表彰も受けた。

下請け・孫請けの仕事が多く、給料は低かったが、それほど苦にならなかった。

(1980年頃)長女が中学校でのいじめが原因で、不登校になった。

仕事が忙しかった。「学校に行きたくないなんて怠けものだ」と叱った。娘は不登校・うつ病になった。

家族で、一生懸命に娘の勉強や生活をサポートして、短大を卒業させた。

長女は、短大卒業後、うつ病と戦い続けていて、一度も仕事につけていない。Bさん夫妻が生活をサポート。

あまり貯金はできていない。

定年まで町工場で働いた。(65歳?とすると、2003年ころ?) (長女36歳)

年金は(二人で)月17万円。これで3人が生活するのは大変。

マイホームを売り(お金に換えて)、賃貸アパート(家賃9万円)に移る。

長女は、現在毎週精神科の病院に通っているが、なかなか良くならない。

3人の生活費は月26万円ほど、貯金を取り崩している。長女の医療費が大きい。

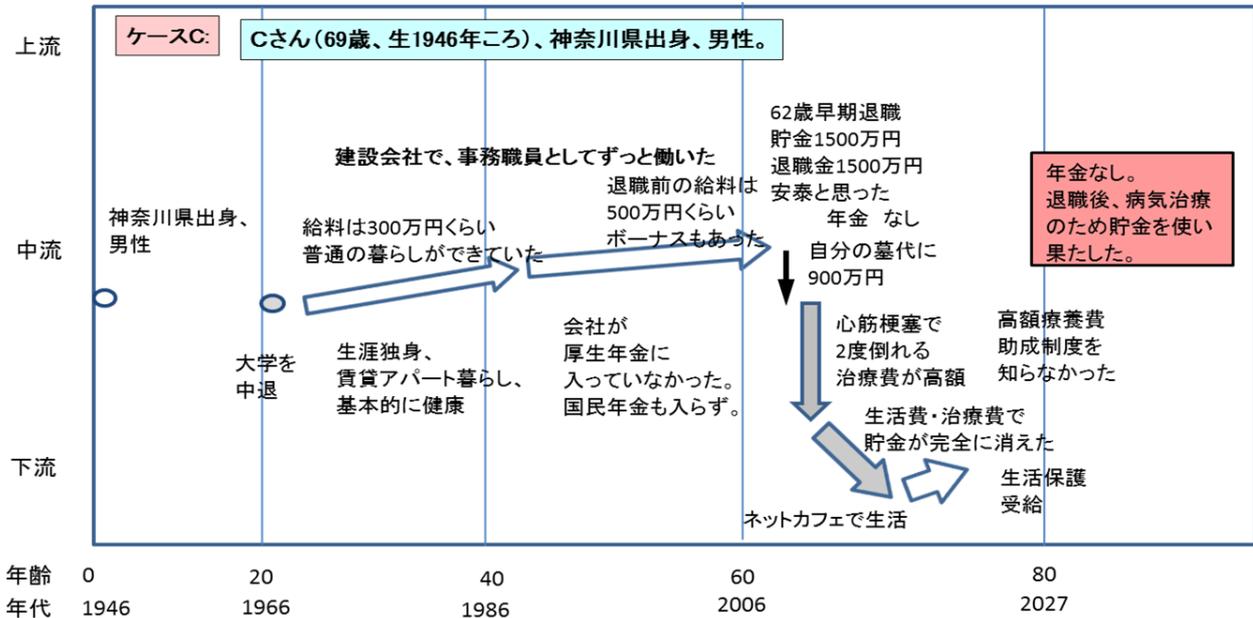
心配事: 自分たち夫婦の健康がいつまで続くか、貯金が底をつきそう。長女の将来が最大の心配。

自分たちはなんとかできても、長女のうつ病が「想定外」

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典（朝日新書、2015. 6） (2) 「下流老人の現実」
 「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015. 9. 6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース ケースC

ケース概要の図示： 中川 徹（2015. 9. 7）



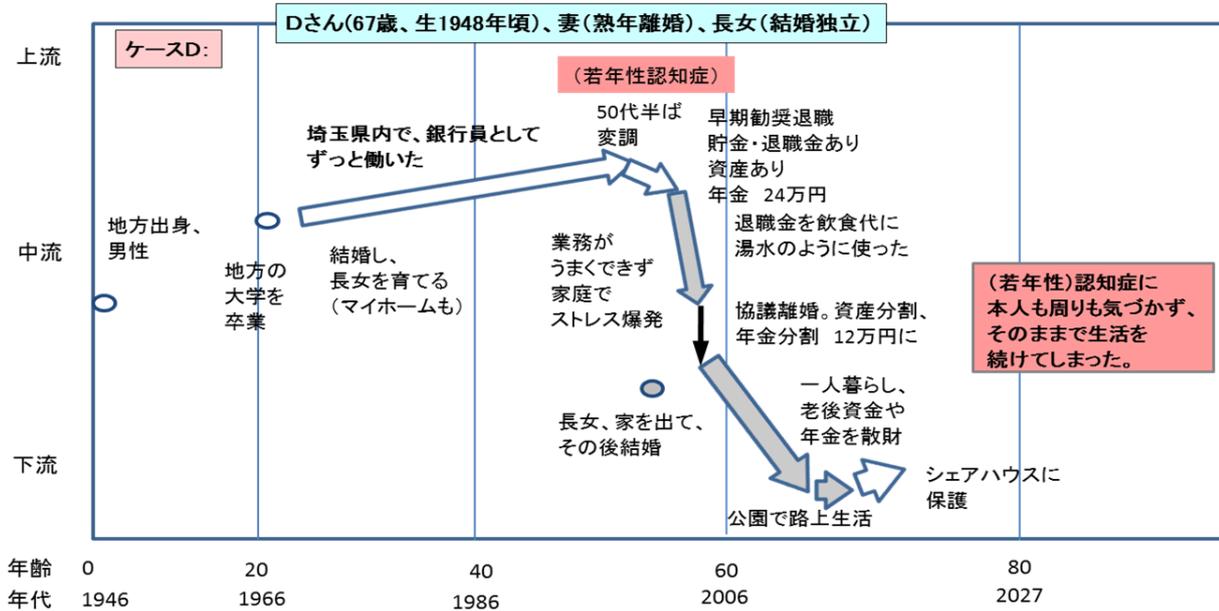
ケースC: Cさん(69歳、生1946年ころ)、神奈川県出身、男性。

- 大学に入学(1965年ころ?)、学生運動が激しくあまり授業がなかった。
- (22歳頃?)大学を中退、神奈川県の建設会社の事務職員として働く。
- 若いころは年収300万円くらい。普通の暮らしができていた。
- 生涯独身、賃貸アパート暮らし。基本的に健康。
- 40年間事務職員として働いた。会社は厚生年金に入っていなかった。
- 退職前は、年収500万円くらい、ボーナスもあった。
- 62歳(2008年頃)で、早期退職。少し体調を崩すことも増えたため。
- 退職金約1500万円、貯金約1500万円。合計3000万円で安泰と思った。
- 年金はなし(厚生年金、国民年金に入っていなかったから)
- 自分の墓くらい自分で用意しておきたかった。業者に約900万円払った。
- 心筋梗塞で、1年間に2度倒れた。手術、治療、長期入院の費用が高額。
- 高額療養費助成制度については知らなかったから、利用しなかった。
- 治療費と生活費で、貯蓄は完全に消えてしまった。
- 賃貸アパートも追い出されて、ネットカフェで生活していた。
- NPOに相談に来た。(2014~15年頃?)
- 現在、生活保護を受け、(高額な)医療費も補助を受けている。
- 「まさか立て続けに病気になるとは思っていなかった。生活保護になるとは思っていなかった。」

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典（朝日新書、2015. 6） (2) 「下流老人の現実」
 「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015. 9. 6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース ケースD

ケース概要の図示： 中川 徹（2015. 9. 7）



ケースD: Dさん(67歳、生1948年頃)、妻(熟年離婚)、長女(結婚独立)

地方の大学を出て、埼玉県内で銀行員として働く。

結婚し、長女を育てる。順調。

銀行員として、いろいろな付き合い、なじみの飲食店などあり。

50歳台半ば(2003年頃?)から、Dさんに変調。

得意であったはずのお金を数える業務などがうまくできなくなる。職場でストレス。

家族にストレスをぶつけ、喧嘩が絶えなくなる。感情の起伏が激しくなった。

(この頃に若年性認知症を発症したのだと推測されるが、本人も、家族も、職場もそれに気が付かなかった。)

長女は家を出て、その後結婚した。

銀行から退職を促され、早期退職した。退職金を得た。

本人は「会社で嫌がらせをしてくる上司がいて、いやになって辞めた」と(現在)言っている。

退職後、せっかくの退職金を飲食代に湯水のごとく使った。本人は「昔のなじみの店だから」という。

その後、夫婦関係が破たん。協議離婚。資産、年金を半々に分配。

60歳代で、年金12万円で一人暮らし。

一人暮らしになったことで、さらに老後資金や年金を散財してしまった。

家賃を3ヶ月滞納し、大家から退去を言い渡された。

数か月間、埼玉県内の公園で路上生活をする。

長女が家賃滞納分を立て替えて支払い、退去費用も捻出した。しかし、それ以上の面倒をみれない。

長女が「路上生活をしている父親を保護してほしい」とNPOに求めた。

Dさんを保護した。認知症が進んでいて、意思疎通ができないことも。

「ありがとう、ありがとう。困っていたんだよ。家に帰れなくなってね。」

NPOのシェアハウスで保護し、介護保険の申請、病院への同行、借金の整理、金銭の管理などを行ってきた。

下流化の最大の原因は、本人も周囲の人々も認知症に気づかず、生活を続けてしまっていたこと。

『下流老人：一億総老後崩壊の衝撃』 藤田孝典（朝日新書、2015. 6） (2) 「下流老人の現実」

「その論点のまとめと可視化（「札寄せツール」による図示）」（中川 徹、2015. 9. 6）

第2章 下流老人の現実 2A: 4つのケース ケース概要の図示： 中川 徹（2015. 9. 7）

